

## プラトン『ポリテイア』 V.473c-e 再検討

納富信留

「哲人統治論」はプラトン『ポリテイア』の核心であり、西洋哲学・政治学史上もっと有名な提案の一つである。だが、それが示される重要な一節には、ギリシア語の解釈でいくつかの問題点がある。議論を整理して、正しい読みの方向を示したい。

(テキストの行数は Slings 版に合わせる。写本 A, D, F, M, q、及び P6 (P. Oxy. 3679) は画像で確認した)

473cII Ἐὰν μή, ἦν δ' ἐγώ, ἢ οἱ φιλόσοφοι βασιλεύσωσιν ἐν ταῖς  
 dI πόλεσιν ἢ οἱ βασιλεῖς τε νῦν λεγόμενοι καὶ δυνάσται φιλο-  
 σοφήσωσι γνησίως τε καὶ ἰκανῶς, καὶ τοῦτο εἰς ταῦτόν  
 συμπέση, δυνάμεις τε πολιτικῆ καὶ φιλοσοφία, (1) τῶν δὲ νῦν  
 πορευομένων χωρὶς ἐφ' ἑκάτερον αἱ πολλαὶ φύσεις ἐξ ἀνάγκης  
 d5 ἀποκλεισθῶσιν, οὐκ ἔστι κακῶν παῦλα, ᾧ φίλε Γλαύκων,  
 ταῖς πόλεσι, δοκῶ δ' οὐδὲ τῷ ἀνθρωπίνῳ γένει· οὐδὲ αὐτῆ  
 ἢ πολιτεία μή ποτε πρότερον φυῆ τε εἰς τὸ δυνατόν καὶ φῶς  
 eI ἡλίου ἴδῃ, ἦν νῦν λόγῳ διεληλύθαμεν. ἀλλὰ τοῦτό ἐστιν ὃ ἐμοὶ  
 πάλαι ὄκνον ἐντίθησι λέγειν, ὀρώντι ὡς πολὺ παρὰ δόξαν  
 ῥηθήσεται· χαλεπὸν γὰρ ἰδεῖν ὅτι (2) οὐκ ἂν ἄλλη τις εὐδαιμονή-  
 σειεν οὔτε ἰδία οὔτε δημοσία.

cII ἐὰν ApC Stob: ἐὰν δὲ pGA DF d4 ἑκάτερον P6 AD Stob: ἐκατέρων F  
 πολλαί] πολιτικαὶ ci. Apelt, χωλαί Madvig, πονηραὶ Liebhold ἐξ ἀνάγκης [P6]  
 ADF: om. Stob d5 ἀποκλεισθῶσιν] ἀποκαθιστῶσι Stob d6 δοκῶ  
 ADF: ἀλλὰ μή δοκῶ Stob ez πάλαι AF Stob: πάλιν D λέγειν ADF Stob:  
 om. M e3 ἄλλη ADF Stob: ἄλλη q? ἰδεῖν] πείθειν Ast εὐδαιμονήσκειν  
 AFDγρ. M Stob: εὐδοκμήσειν M

## 下線部 I

まず、cII-d5 の長い条件節において、下線部にも否定辞 *μή* (cII) がかかっており、d5 の接続法 *ἀποκλεισθῶσιν* は否定の条件文となる。

問題は d3-4 *τῶν δὲ νῦν πορευομένων χωρὶς ἐφ' ἑκάτερον* の取り方にあるが、Adam の提案に従い (Halliwell ら)、男性型 (人間) の所有の属格と取る。部分属格にとると女性型で *φύσεων* の省略となるが、前者がより自然であろう。

d4 *αἱ πολλαὶ φύσεις* 「多くの自然本性」は、文脈では直前の「哲学権力と政治」を受ける

ようにも見えるが、わざわざ「多くの」と呼ぶ理由が不明である。d2-3 *τοῦτο εἰς ταὐτὸν συμπίεση* で示された単一性との対比の強調かもしれない（本来<sub>2</sub> 者を受けける単数形 *τοῦτο* については、Adam, p. 330 参照）。定冠詞 *αἱ* を「別々に歩んでいる人々の」からくる限定と解すると「彼らをもつ多数の自然本性」となり、「哲学と政治とに分かれて歩んでいる人々をもつ諸々の自然本性」という意味になる。503b では、哲学者の自然本性について「諸部分」が挙げられている。

この *πολλαί* の解釈が難しいためか、これまでこの語には *πολιτικάί*（政治的な諸本性）、*χωλαί*（足なえの＝一面的な諸本性、cf. 535d）、*πονηραί*（劣悪な諸本性）といった読み替え提案がなされている。だが、写本上の根拠はなく、内容上必ずしも相応しくはない。複数型の *φύσεις* は *Rep.* で 22 例あり、「自然本性＝自然本性をもつ人々」の意味に解される箇所もある（519c9, 535a9 が典型）。だが、「多くの人々の素質」（藤沢）は、意識にしてもかなり無理がある。

最後に、*ἀποκλεισθῶσιν* の受動態は「阻止される、妨げられる」の意味で、「～を」にあたる属格が必要と考えられる。意味上「そのように別々の方向に進むことを」を補って理解する。藤沢訳は、「現在のようにこの二つのどちらかの方向へと別々に進むのを強制的に禁止されるのでないかぎり」として、*τῶν δὲ ... ἐφ' ἑκάτερον* の属格を中性としてその目的語に当てるように訳しているが、構文理解としては不正確である。あるいは、「多くの本性を閉め出す」という意味で自動詞的に解す可能性もある。その場合には属格を補う必要はない。

Stobaeus IV, 1.107 は *ἀποκαθιστῶσι* 「元に戻されない限り」という語を読んでいる。元来は一つであった本性を回復するという意味であろうが、異読の根拠は不明。

## 下線部 2

ここで問題は e3 女性主格型 *ἄλλη*（校訂：Aldus, Stephanus, Bekker, Ast, Schneider, Burnet, Chambry, Halliwell；訳：Bloom, Grube-Reeve, Vegetti、山本光雄）と、与格型 *ἄλλη*（校訂：Stallbaum, Baiter, Hermann, Schmelzer, Jowett & Campbell, Adam, Slings, Shorey；訳：Cornford, Richards, Griffith, 藤沢）とで、読みが分かれている点である。

与格型 *ἄλλη* の読みは q 写本（Monacensis 237）でのみ報告されている（但し、画像で確認する限り、絶対に確実とは言えない：113v）。q は Boter, p. 42 によれば 15 世紀の D 系統マイナー写本なので、文献学的根拠は薄い。親写本と推定される b（Florentinus Laurentianus 80,19）も含め、他の写本にこの読みが報告されていないことから、もし下書きのイオタが付いているとして、おそらく写字者による修正であろう。

写本どおり主格型で読むと、通常は女性型に πόλις か πολιτεία が補われる。多くの解釈者は「他のポリスは」と取るが (Grube-Reeve, Vegetti ら)、この文脈でポリスは複数型で用いられているのに対して、直前の d7 で πολιτεία という単数型が登場するので、「国制」を指す可能性もある (山本)。ἄλλος は、τις を伴う否定文で “no other” の意味となる (LSJ ἄλλος II 1)。

他方で「ポリス、国制」を主語にすると、「私的にも公的にも幸福になる」が一見理解しにくくなる。しかし、ポリスについて「幸福」を論じる箇所は、IV.421a-c や V.466a (もっとも幸福なポリス) にあり、VIII.566d では人とポリスの両方に幸福が論じられる。IX.576c-e ではポリスの幸不幸を人間に当てはめる議論をしており、ポリスを主語にして「幸福である」と語られることは不自然ではない。VII.541a では「ポリスと国制」が一体で幸福とされている。421c にあるように、ポリスの幸せにおいて個人の幸せが論じられるべきだとすると、「私的に」はそこに住まう個々人の幸福を、「公的に」はポリス全体での幸福を指すと考えることができる。

与格型 ἄλλῃ の場合「(哲人統治制と) 別の仕方では」の意味になり、“there is no other way” (Cornford)、「こうする以外には」(藤沢) といった訳になる。そこで主語として残る τις に「ポリス」(Griffith) か「国制」(藤沢?) を補うと、実質的に主格型の場合と同じ意味になる。その場合、写本上は主格型に分がある。他方で、τις を男性型で「人は」と取る可能性もあり (栗原裕次の示唆)、「私的にも公的にも」という限定句は理解しやすくなる。確かに、個人の幸福は 472c で言及されるように対話篇全体の主題であるが、第 5 巻では論じてきたポリスが最善であるか、可能であるかが問題であり、本節前後で個々人の幸福は論点になってはいない。「人は」と主題を変えることは、文脈上難しいと判断する。

いずれにせよ、写本の裏付けから、主格型で読む方が堅実であろう。

## 点線部

d7 εἰς τὸ δυνατόν は、通常「可能な限り」という熟語で、プラトン著作集では 16 例ある (*Rep.* では、他に 381c7, 464d3-4, 500d2, 587a1)。だが、この句は形容詞やその最上級を伴うのが普通であり、独立に用いられるのはやや不自然である。他方で、φυῆ は「生じる」の意味で「本性」φύσις に対応する。この文脈では、植物の比喩で、「可能なものへと成長する」といった意味 (査読者の示唆) を掛けているのかもしれない。

d7-e1 φῶς ἡλίου ἴδῃ 「(この国制が) 太陽の光を見る」とは、「生存する」を意味する詩的表現である (LSJ φάος I.1b 参照: *Il.* 18.61, *Eurip. Hipp.* 6, *Hel.* 60, *And. Mys.* 68.4 等)。「光」は栄光や救済を暗示するが (*Aesch. Ag.* 22-24 等)、ここでは第 6 巻の「太陽の比喩」、さ

らに第7巻の「洞窟の比喩」でのアイデア界の「太陽」、すなわち「善のアイデア」を予示している (VII.515e7, 516b1-2, 532c1, cf. 517b3)。この点に注意を払う注釈は見られなかった。

以上の検討から、次の訳を提案したい。

## 試訳

私は言った。「もしも知を愛し求める哲学者たちが諸ポリスにおいて王となるか、現在王や権力者と言われている者たちが、純正にかつ十分に哲学するようになるのでなければ、言い換えると、これ——即ち、政治権力と哲学——が同一のものになり、(1) 現在各々の方向へと別々に歩んでいる人々がもつ多くの自然本性が、強制的に(別々の方向に進むことを)止められない限り、親愛なるグラウコンよ、諸ポリスにとって、また思うに人間の種族にとっても、諸々の悪が止むことはないのだ。また、今私たちが言論で詳しく辿ってきた国制も、それ以前にはまだ可能に生じることはないだろうし、太陽の光を見ることもないのだ。だが、これこそ私に前から語るのを躊躇させていたものなのだ。常識<sup>ドクサ</sup>に反して多くが語られるだろうと見て取っているのね。(2) 他のどんな国制も私的にも公的にも幸せになり得ないだろうと、見るのは難しいことなのだから。

(慶應義塾大学)

## 主な参考文献

- Adam, J. (1902/1963<sup>2</sup>), *The Republic of Plato*, vol. I; revised by D. A. Rees, Cambridge University Press.
- Boter, G. (1989), *The Textual Tradition of Plato's Republic*, Leiden: E. J. Brill.
- Burnet, J. (1902), *Platonis Opera IV*, Oxford Classical Texts, Oxford University Press.
- Cornford, F. M. (1941), *The Republic of Plato*, Oxford: Oxford University Press.
- 藤沢令夫 (1976/1979), プラトン『国家』、岩波書店「プラトン全集」11; 岩波文庫、上。
- Griffith, T. trans. (2000), *Plato, The Republic*, G. R. F. Ferrari (ed.), Cambridge University Press.
- Grube, G. M. A. trans. (1992), *Plato, Republic*, revised by C. D. C. Reeve, Indianapolis: Hackett.
- Halliwel, S. (1993), *Plato: Republic 5*, Warminster: Aris & Philips.
- Jowett, B. & Campbell, L. (1894), *Plato's Republic*, 3 vols, Oxford University Press.
- Richards, I. A. (1966), *Plato's Republic*, Cambridge University Press.
- Slings, S. R. (2003), *Platonis Rempublicam*, Oxford Classical Texts, Oxford University Press.
- Vegetti, M. (2000), *Platone, La Repubblica*, vol. IV, Napoli: Bibliopolis.

\*本考察については、科研費補助金基盤研究(B)研究会で、佐野好則、栗原裕次氏らから貴重な示唆をいただいた。お礼を申し上げたい。